蜻蛉日記指導の一つの実践

――普通科甲のばあいを中心に――

伊東武雄

はじめに

古典を文学作品として生徒に享受させたいといつも念じながら、とかく入試を意識した機械的な読解指導や文法指導に終始したり、安易な口語への言いかえ作業に陥ったりしている。この素朴な反省に立って、43年5月から7月にかけて、普通科三年甲（女54名）、乙（男24・女34・計58名）を対象に、蜻蛉日記の指導を実践した。甲組のばあいを中心に、実践のあらましと享受の実態を報告し、いくつかの反省をつけ加えたい。

テキストは、角川書店「高等学校古典乙Ⅱ」を使用し、甲組では、堀辰雄「かげろふの日記・曠野」（角川文庫）を全員に購入利用させた。

指導の実践

学習の目標は、次のように設定した。

1　古典の世界―特に平安女流文学の世界で、女性たちがどのように生きたかに関心をもたせる。

2　作者の生き方を理解させる。一夫多妻の社会で、道綱母がどのように苦悩しながら生きたかを考えさせる。

3　作者の心情にせまらせる。道綱母の生き方を、善い悪いの立場からだけでなく、愛の世界の中で、どのように感じ考えながら生きたかを、具体的に読みとらせる。

この目標に従って、次の学習指導を展開した。

導入として、古典への興味関心をたかめるために、平安時代の一人の女性の生き方を描いた堀辰雄の「曠野」をとりあげた。これは今昔物語巻30第四〝中務大輔娘近江の郡司の婢となる語〟をみごとに創作化したもので、堀辰雄のお気に入りの作品である。(注一) 教師朗読の後、次の項目について、グループで話しあいを行なわせた。

(一) 興味度　(二) 理解度　(三) 感じたこと考えさせられたこ

Ⅰ　導入……堀辰雄〝かげろふの日記・曠野〟の話しあい　——古典への興味・関心をたかめる　2.5　5・28（火）

1　〝曠野〟の学習　5・29（水）

本読みとグループによる話しあいと発表　5・30（木）

2　〝かげろふの日記〟の話しあい——蜻蛉日記の世界を理解させる　1　6・1（土）

グループによる読後の話しあい　6・6（木）

〈アンケート作成〉

Ⅱ　展開…教科書「蜻蛉日記」の読解と鑑賞　——作者の生き方と心情を理解させる　2　6・5（水）

読解の三段階法素材読みの適用と心情語の着目による　6・19（水）

1　父の旅立ち……新妻としての心細さ（心細うかなし）　1.5　6・20（木）

2　心憂き世……妻としての苦悩（憂し、心憂し）　1.5　6・25（水）

3　道綱の元服……母としての喜び（うれし）　1　6・26（木）

〈期末テスト〉

Ⅲ　終結…教材書プリントによる作品鑑賞のまとめ　1　7・1（月）

4　ゆするつき　道綱麿を放つ（傍注プリント）——作者の苦悩を理解させる　1　6・28（火）

5　蜻蛉日記序　——学習のまとめと確認をさせる　1　7・11（木）

〝かげろふの日記〟年表を利用

〈感想文の提出〉

乙の級では、次のように実施している。

5・2（木）　蜻蛉日記と王朝日記文学の流れ

5・6（月）　蜻蛉日記序

5・8（水）

5・9（木）　父の旅立ち

5・15（水）

5・16（木）　心憂き世

5・22（水）

5・24（金）　道綱の元服

6・1（土）　〝曠野〟

教師朗読45分～15分

それを聴いての感想

と　(四)　主人公について　(五)　相手の兵衛佐について
(六)　死を選んだ結末について　(七)　表現について

話しあいは、実に楽しそうに、かつ真剣になされた。その結果は、話しあいの項目を生かして、アンケートに求めた。(注二)

次に、蜻蛉日記の全体を大きくつかませるために、堀辰雄「かげろふの日記」を利用した。読みは自宅学習とし、一時間をかけて、次の項目について話しあいをさせた。

(一)　興味度　(二)　理解度　(三)　印象点
(四)　道綱母の生き方―兼家への行為を中心に―
(五)　兼家について―どのような人物か、どう思うか―
(六)　道綱母の人間像　(七)　その他の感想

生徒の家庭での読みが十分でないせいもあって、興味度、理解度とも、「曠野」に比べて低く、話しあいも前回に比べると、かなり低調であった。

この二つの話しあいを土台として、教科書の四つの教材の読解と鑑賞を展開した。読解の立場は、心情語に着目し、藤原与一先生の読解の三段階法―素材読みを適用し、作者の生き方と心情を具体的に理解させようとした。(注三)

次の点に留意した。

1　父の旅立ち、「心細し」「かなし」という心情語に着目させ、新妻としての心細さを理解させる。
2　心憂き世　「憂し」「心憂し」という心情語を中心にして妻としての苦悩を読みとらせる。
3　道綱の元服　「うれし」という心情語によって、その子道綱の成長に対する母としての喜びを味あわせる。

指導の大要は次のとおりである。

(1)　父の旅立ち―上巻　天暦八年十月（九五四）―

○　ねらい　父と娘（作者）の別離の悲しみを理解させる。
○　留意点
①　時を確認させる。
②　事件を三つ指摘させ、内容を三つに分けさせる。
③　主語を確認させながら、内容を読みすすませる。
④　父親の行為と心情を理解させる。
⑤　作者の心情（心細し、悲し）の原因となるものを考えさせる。
○　作品分析（注四）

1　時　天暦八年十月（初冬―いとあはれなるほど）
※　この年の初秋兼家（25歳）と結婚　時雨・露

ウ　兼家の返歌
あへしらひ　目も見合せず思ひ入りてあれば
（ほどよくとりなす）

2　場所　ここ（道綱母の家）

3　事件

ア　（物忌みなるほど）

歌の贈答

兼家　心もとなげ⇩

焦燥感

じれったさ

①嘆きつつ＝嘆き

②返す衣＝せつなさ

③露・時雨＝涙→悲しみ

道綱母　慕情　いかでかは

返す衣のたれもぬるらむ

可憐、いじらしさ　二人とも

理知的→思ひあらばひまなしものを

火（情熱）　いと古めきたり

見る人（回りの人）　（恥らひ）

イ

父の出立　心細く

いと悲しきこともにも似ず

〈今はときみないでたつ日〉

行く人（父・倫寧）　とまる人（道綱母）

せきあへぬ「泣く」→言ふかたなく悲しき

えいでやらず　「悲嘆」

また見泣き、ほろほろ　しばしは見む心もなし

とうち泣きて　ためらひて（心をしずめて）

兼家への贈歌→いみじう悲し

「娘を思う父性愛」※　「女性の運命のはかなさ」

道綱母への恨みごと

「我を頼まぬなんめり」

いと頼もしげに見えず

不安感

旅の空を思ひやるに

いとあはれなるに

悲しき心細さ

4　作者の心情

①心細し、悲し、あはれ

わが頼もしき人みちのくにへいでたちぬ　（事件）

時はいとあはれなるほどなり　（季節）

②人はまだ見慣るといふべきほどにもあらず（時期）

③→（兼家と）見ゆるごとにたださしぐめるに

のみあり

④→心細く悲しきことにも似ず（不安）

人の心はそれに従ふべきかは　（時代）

男性への不信感

→ただひとへに悲しう心細きことをのみ思ふ

※Cf

ア　更級日記　父の任官（親となりなば）

父の赴任（七月十三日くだる）

イ　村山リュウ「源氏物語のすすめ」（講談社現代新書）

明石入道の明石上への愛

朱雀院の女三の宮への愛

宇治八の宮の姫君への愛

まず、時と事件に着目させて、内容の整理（作品分析）を行なわせた。次に、なぜ父と娘の別れがこのように悲しいのか、時代のきびしさを理解させて、具体的にわからせるように努めた。そのために、次の二つの話をした。一つは、二年のときに学習した更級日記を持参させ、「父の仕官」「父との別れ」の場面を復習し、常陸介として下っていく孝標と更級日記の作者孝標女との別れの悲しみを理解させた。さらに、源氏物語の明石入道・朱雀院・宇治八宮の三人の父性愛をとりあげ、当時の女性のはかない境涯と、父親の娘への愛情を理解させ、「おろおろと泣く」この場合の倫寧の行動と心情を理解させようとした。その上で、作者の心細し、悲しという心情の原因となる条件四つを、右の分析のように、事件・季節・時期・当時の世相（時代）に求めて、原文の表現を指摘し理解させた。

この学習の感想を、生徒は「学習記録」(注五)の「印象に残ったこと、考えさせられたこと」の欄に、次のように記している。

ア　現在生きていることが幸福に思われた。（女）

イ　平安時代の女性のはかなさ、現在の私たち女性から見ると、この時代の女性は、こんなにまで弱かったのか不思議でならない。（女）

ウ　父の娘に対する愛情と男に頼らねば生きていけない女性の立場の低さ。（男）

(2)　心憂き世――上巻天暦九年十月以降（九五五）――

○ねらい　作者の微妙な心の動きを理解させ、その人がらを考えさせる。

○留意点

①　時・場所・時刻を確認させる。

②　時刻を示すことば（夕さりつ方・暁方・つとめて）に着目し、事件を三つにまとめさせる。

③　作者の行為と心情を理解させる。

④　作者の性格を考えさせる。

⑤　注意すべき表現をとりあげ、そのように表現した理由を考えさせる。

○作品分析

1　場所　これ（作者のところ）　※天暦九年十月

2　時刻（時）―　3　事件―　4　作者の心情―　5　性格―　6　表現とその奥にあるもの

夕方そのものになる

ア（夕さりつ方（夕方））

心情語の確認

・兼家の辞去　↑「心得で」　(1)　疑惑
「うちのがるまじかりけり」　(あやし)　尾行させる

・新しい通い所の発見
「さればよ　情ない—観照的　怒り　直感力の鋭さ
いみじう心憂し」　(2)　嫉妬　勘の鋭さ
「言はむやうも知らである」苦悩　(3)　懊悩　愛情の強さ
(二・三日ばかり)　夜深し　嫉妬心の強さ
イ〈暁方〉　(夜明け前＝早朝でまだくらいころ)
「門たたく時」しののめ→あけぼの
いやで—感情的

・兼家の来訪　↓「憂くて」　(4)　不快　憂し
喜び　心が浮かず
→さなめり　怒り＝愛憎　・開けさせない　(5)　抵抗　楽しまない気持
ウ〈つとめて〉(翌朝)　気性の激しさ
・歌の贈答　「なほもあらじ」　(6)　反省　女らしさ、可憐さ
○道綱母・嘆き　悲嘆
「うつろひたる菊」　つつ……いかに久しきものかは知る　(反語表現)→強い訴え
「例よりもひきつくろひて」　待つ身の苦悩・怨情　(7)　悲嘆・愛の衰えへの嘆き
○兼家　げにやげに　冬の夜ならむ槙の戸も……わびしかりけり
弁解　(現在冬ダガ)　冬の夜戸外で待つつらさ

兼家の態度への批評
ことなしびたる(余情余韻の連体形止め)
さりげない風　余情表現→　強い非難
「いとあやしかりつる」　(8)　疑問

（兼家公然と町の小路の女のもとへ通う）
↓しばしはうちになど言ひつつあるべき
いとど心づきなく思ふことぞ限りなきや
〈気にくわない・不愉快だ〉　(9)　不満
不快

まず、時刻を示す三つのことば「夕さりつ方」「暁方」「つとめて」に着目させ、内容を事件によって、三つにまとめさせた。次に表現をおさえながら、作者の心情と行為（「心得で」↓尾行させる、「心憂し」↓「言はむやうも知らである」、「憂くて」↓開けさせない、「なほもあらじ」↓「うつろひたる菊」に「例よりもひきつくろひて」書いた文をつける）を分析して、疑惑↓嫉妬↓懊悩↓不快↓抵抗↓反省↓悲嘆とうつりかわる作者の心のうねりを指摘させた。特に、愛するがゆえに憎まずにはいられない複雑で微妙な女心を理解させようとした。そして、作者の性格―勘の鋭さ、愛の強さ、嫉妬の深さ・気性の激しさ・女らしさ・可憐さという複雑な女人像が理解できるように努めた。最後に、表現の問題にふれ、反語表現による強い訴えと連体形止めによる余情表現（強い非難）をとりあげ、そのような表現をしなければならなかった作者の気持ちを考えさせた。

この学習の、生徒の感想には、次のようなものがあった。

ア　作者が手紙を見ていて、召使いに兼家のあとをつけさせた。女性の気持ちがわかるような気がする。（女）

イ　内容を理解し、解釈するには、主人公の立場に立って、考えることが第一だ。その結果、道綱の母の性格だが、女性として特別なものには感じられなかった。女心は昔も今もたいして変わりはないと私は思った。（男）

ウ　一夫多妻社会のことは、日本史でも、他の本でも読んだことがありました。私は、昔の女の人は、このような社会には、何の矛盾も感じなかったのかと思っていましたが、そうでないことに安心しました。（女）

エ　兼家が訪れてきたのに、作者が意地をはって戸を開けなかった。なぜ、あけなかったか、本当は来てほしいのに……。私なら素直に開けるのに、賢い人はちがうなあと思った。でも一人の女性として理解できるところもあった。（女）

(3)　道綱の元服―中巻　天禄元年（九七〇）―

○　ねらい　年譜を作成させ、母性愛に生きる作者の心情を考えさせる。

○　留意点

① 日づけに着眼し、一つずつ事件を指摘させる。
② 作者の微妙な心理を読みとらせる。
③ 主語の省略に注意させる。
④ 作者が到達した境地（母性愛）について考えさせる。
⑤ 注意すべき表現を指摘し、その奥にある作者の心情を理解させる。

○ 作品分析

日づけ	事件	作者の心情
八月　五日	司召し、兼家右大将に昇進 兼家少ししばしば来訪	いともめでたし 結構だ 客観的傍観的
十日	道綱の元服 その夜兼家とどまる	不安 こたみや限りならむ うらめしさ
十月　廿六日	大賞会の御禊行列を見物 正装した兼家を見る 人々の噂をきく「人にすぐる」 賞讃　「あたらし」	つらし 目くれておぼゆる　せつなさ いとどもののみすべなし 悲しみ
十一月になる	大賞会近づく 人々のさわぎ 兼家やや間近く来訪 叙爵の用意	ののしるべき 余情表現 詠嘆 心あわただし
十一月　七日	大賞会 兼家病いと偽って退出 余爵のお礼回り	幸福であった日 昔のここちした 満足 いでられぬ ＝尊敬表現 頼もしさ ＝尊敬の念
十六日	母としての喜び	いとあはれにうれしき心地す 母性愛　喜び

○「こたみや限りならむ」兼家の訪れがたえること
　愛が失われることへの不安→「ものはかなし」
　喪失の不安・「床離れ」のさびしさ
　かげろふのような自己
○「出でられぬ」兼家への尊敬語は非常に少ない
○「うれし」道綱への愛情が示されるところのみ使用（8例）

まず、日づけに着目させ、その時々の事件を指摘させた。結果は年譜の形にまとめさせた。次に、その時その時の心情を理解させた。特に、「こたみは限りならむ」という喪失の不安に注意させた。

最後に作者の到達した境地、母性愛について考えさせた。その際、蜻蛉日記に用いられている「うれし」という心情語八例は、すべて道綱への愛情に関係しているばあいだけであることを強調した。

(4) **蜻蛉日記序**（注六）

○ねらい　蜻蛉日記の執筆の動機・内容・抱負・反省を理解させ、その価値を考えさせる。

○留意点・今までの学習をもとにして、できるだけ具体的に理解させる。

・蜻蛉日記学習のまとめとして利用する。

・補助教材プリント（ゆするつき、道綱麿を放つ、かげろふ日記年表）を活用する。

○作品分析

(一)　執筆時の状態

愛情の世界

① 世の中にいとものはかなく　（不安）　兼家の愛の衰えへの不安　↑「ゆするつき」

愛の不安定さ

② とにもかくにもつかで　（迷い）　出家か死か　中途半端の生き方　↑「道綱麿を放つ」

③ かたちとても人に似ず　……ことわりと思ひつつ　（容ぼう）

心魂もあるにもあらで　（あきらめ）　苦悩の凝視

（精神）

ただふし起き明かし暮らす　……単調な生活

（手もちぶさた＝つれづれ）

古物語＝そらごと　世に多かるそらごとだにあり

（いつわり）

(二)　執筆の動機　反撥　真実味の欠如への怒り

古物語の克服　（蜻蛉日記の文学史的価値）

(三)　執筆の抱負

正妻でない

内容―人にもあらぬ身の上　→　めずらしきさま

様式―日記　→　写実性への企図

目的―天の下の品たかきやと問はむ例にもせよかし
話しかける姿勢　教育的意識
「呉竹を植えさす」
「長精進蛇の夢を見る」

㈣　執筆時の反省
過ぎにし年月ごろのこともおぼつかなし　不明瞭　叙述の不備の自覚
さてもありぬべきことなむ多かりける
1、書きるしるしておいてもよいと思うこと
2、書かないでおいてよいこと
3、書きあやまったり、もらしたりしそうなこと

まとめとして、蜻蛉日記の序をとり扱った。それに先立って、二つの補助教材をプリントして、作者の苦悩とその生涯を理解させようとした。一つが、道綱母の心情理解のための、「かげろふの日記」年表であり、もう一つが、「ゆするつき」（上巻）（康保三年八月　兼家38歳）と「道綱鷹を放つ」（中巻天禄元年・道綱16歳）の傍注プリント（省略）である。これらを利用して、序文の抽象的な表現が具体的には、日記のどの部分と関係があるのかを理解させようとした。

本文の分析は、序文を㈠　執筆時の状態　㈡　執筆の動機　㈢　執筆の抱負　㈣　執筆の反省の四つに分けて内容の整理をした。次に、抽象的表現を具体的に理解させる一つの方法として、「世の中にいとものはかなく」という不安の心情を「ゆするつき」で、「とにもかくにもつかで」という迷いを「道綱鷹を放つ」に示される、死か出家かという迷いで理解させようとした。

生徒の理解度は十分でなく、〝作者自身が自分のことについて主観的に描いているようで、はっきりわからなかった。〟（学習記録、乙、女）という声がきかれた。

堀　辰雄　かげろふの日記　年表　（心情理解のために―）

〈その一〉

序

天暦八年（九五四）
初夏　兼家より求婚。使い馬にのってくる　驚き
初秋　兼家と結婚。
○十月　父陸奥守として出発。　心細さ
天暦九年（九五五）

八月末　道綱を出産。　不安
九月　兼家が他の外の女にやる文を発見。　嫉妬
○十月　兼家の通い所をつきとめる。
兼家訪れても門を開けず、「嘆きつつ」の歌。　悲嘆

天暦十年（九五六）
三月三日　桃の節句、兼家来ず翌日来訪。　憎悪
五月　姉為雅邸へ移る。　孤独
時姫に消息。
六月　長雨。兼家訪れず。　空虚
十日　兼家小弓の矢をとりによこす。　悔しさ
秋　兼家咳をしつつ宮中より退出時通り過ぎる。　期待　失望

〈その二〉
天徳二、三年道綱の成長を頼みにはかなげに過す。　無為
九五八～九五七　道綱、兼家のことばをまねる。　悲嘆
兼家時々訪れる。　自嘲
再婚をすすめる人がある。　懐悩
兼家とのいさかい。怨み顔をして帰る。　不安　せつなさ
町の小路への愛衰え、子供死ぬ。　満足

安和二年（九六九）
閏五月　作者病む、兼家訪れず。　苦痛
兼家新邸を造る。　心細さ
遺書を書く。道綱のことを頼む。　心の静けさ

秋　病い回復。兼家新宅へ移る　辛さ
十一月　雪、身の衰えを感じ、生を悔やむ。

〈その三〉
天禄元年（九七〇）　若苗を植えさせたが枯れる。　悲しさ
兼家訪れ、弁解。　不快
作者、死を思い、出家を思う。　心憂さ
道綱鷹を放つ。
七月　兼家、盆の供物をよこす。ひねくれた返事。　悲嘆
二十六日相撲節会見物。
兼家・道綱を見送ってこず。　腹だたしさ
八月　兼家突然訪れる。道綱に耳うち。　喜び
十日　道綱元服。昔に返った気持。　感謝
兼家訪れず、道綱いつも一人で退出　苦痛
十二月七日兼家ちょいと訪れる。　不快
七八日　雨。昔を思い現在の不幸な宿世を悲しむ。
深い物おもい　「思いせく」の歌。　苦痛

〈その四〉
天禄二年（九七一）
三月中旬　呉竹を植えさす。
兼家来訪、日ごろの我慢を訴える。　悔しさ辛さ
縫物を頼んでくるが、返す。
三月　父倫寧邸へ行く。兼家より文　あつさ・苦痛
兼家よりの音信とだえる。　重苦しさ
四月一日　長精進をはじめる。

死を祈る。現在の無信仰を悔やむ。
昔の気強さ　迷信否定を反省する。　後悔
夢（蛇）を見る。
五月　長精進をおえ、自宅へ帰る。
兼家先駆をさせながら通り過ぎる。　失望・怒り
六月　兼家より文。　辛さ・悔しさ
西山参籠を思い立つ。
兼家の薬を上筵の下から発見。　なつかしさ
兼家へ文。兼家より中止要求の文。

〈その五〉

六月四日　西山へ向う。幸福であった昔を回想。　なつかしさ
淋しい山寺につく。　わびしさ
兼家来訪を伝える使者くる。　悲哀
兼家来訪、作者会わず追いかえす。　片意地・つれなさ
道綱階段を下りあがりして疲れを訴える。
六月五日　道綱を京へ使いに出す。　愛憎・したわしさ
京より叔母が訪れる。　気安さ
蛍とび、時鳥、水鶏なく。
宿世を切なく思い、道綱の粗食をかわいそうに思う。
作者の物思い続く。道綱、母の体を気づかう。
尼への気持を道綱に話す。
叔母の下山。作者身のつたなさを思いめぐらす。
父よりたより。里へはおりまいと思う。
六月十五日　道綱を、滋養をとりに京へ立たす。　愛情
夕立ち激しく、その身を気づかう。　悲嘆
兼家への返事をもたす。激しい夕立。雷

〈その六〉

六月　兵衛佐道隆訪れ、下山をすすめる。　人なつかしさ
父倫寧が訪れ、下山をすすめる。　迷い
兼家が訪れ、無理やりにつれかえす。
京の家につく。
兼家方違えをすすめるけどきかず。
翌朝兼家より文。

〈その七〉

七月三日　兼家来ると言って来ず。
七月四日　兼家の妹登子より同情の文、返事を出す。
物思い日が続く。深い自己凝視。　切なさ

〈その八〉

七月七日　夜思いがけず兼家来訪。
何気ないようにもてなす。　平静
いつもの弁解、翌朝かえる。
父、伊勢守になる。静かな所へ出向く。
七月中旬　兼家訪れ、乱暴を働く。作者堪える。
いつもの兼家にかえり、いつになく心をこめて語る。　平静
翌朝、兼家颯爽とした姿で帰る。
胸をしめつけられる思いで、後姿を見送る。　慕情

享受の実態

学習後、普通科甲では、「蜻蛉日記を学んで」と題して、感想文を原稿用紙二～三枚に求めた。提出者52名は、それぞれさまざまの受けとめをしているが、作者の人がらと生き方を論じているものが殆んどであった。大別すると次の四種となる。

第一は、作者の人がらをその生き方も含めて、まっこうから批判し、否定しているものである。やや主観的独断的で、読みとりにかなりの問題を有しているものが多い。

○　私はこの本を読みおわったとき、この作者はなんて意地張りなんだろうと思った。しかも兼家をあまり信じていない。兼家が、「一生おまえのことは忘れない」と言っているのに。「人の心なんか頼みになるものか」と思っているところなんか、はがゆくてしかたがない。素直でない人だとも思う。よくもまあこんな女性を好きになったとは、兼家も不幸だ。自分を信じてくれないなんて兼家もいやだろうに……。　しかも、日がたつにつれて、兼家の親切が口ほどでもないように思われると書いてある。いったいこの人は人を信じたことがあるのかと疑いたくなる。心細いと思うのなら、心細くないように兼家を全面的に信頼すればよいだろうに。そうかといって、全く信頼していないわけでもないのだし、嫌いでもないのだから不思議だ。

兼家がやってきても、自分の気分がすぐれなかったら話もせずにいる。いくらなんでも利己主義だ。自分の気分次第で人に接する時の態度に変化があっていいものだろうか。

嫉妬の強い人でもある。それにとっても強情者。兼家がきても戸を開けてやらないでいる。よくもそんなことが平気でできたものだ。作者がもっと素直な性格だったらよかったのに。兼家も男なら男らしくあれほどまでされたのなら、道綱母のところに行かなくてもさっぱりあきらめればいいのに。

とにかく私はこのような性格の人が嫌いだ。赤ちゃんが死んだときけば悲しんでやるでもなく、逆に嬉ぶほどの残酷な人。

それにひきかえ、道綱はこの人の教育のもとでよく純真に育ったものだ。

兼家が来てくれることを望んでいながら来るといやな気がするとは、どういう気なのだろうか。きっと情緒不安定な人なのだ。作者が長精進したあと兼家が迎えに来たが、もし強引につれもどされなかったとしたら、きっと後悔するだろうに。この人は自分から行こうとはしなかった。どうして素直に行かなかったのだろうか。はぶてる年頃でもないだろうに。それとも作者は兼家が自分を愛していてくれていると確く信じて疑わなかったのだろうか。だからあんな生意気なことができたのだろうか。

とにかく私はこの人には腹がたってしかたがない。（感想例1）

第二は、作者の長短の両方を見ているものである。批判はしているが、長所も認め、肯定的・同情的なものが多かった。

○　私がこの日記を読んで一番感じたのは、作者があまりにも、わがままで強情だということです。私もこの作者と同じ女性ですから彼女が兼家を家の中へ入れなかった時のことや、その他のところでわざと兼家に冷たくしたようなところもわからないことはありませんでしたけれど、やはり、この時代の女の人にしては強すぎていばりすぎだと思いました。

次に、私はこの日記の中に出てくる人物の中では作者の子供の道綱が一番かわいそうで、そして、この道綱の気持がわかるような気がしました。作者は道綱に対して、もっと母親らしいところを見せたら良かったのにと思いました。

だけど、この時代、女の人は、男の世話をしてもらわなくては生きていけない時に、彼女はよく自分の思ったことを主張し、そして行動したと思います。そして彼女は、この時代の女の人がやりたい、言いたいと思ったかもしれないことをやってのけたので、えらいと思う。

最後に、私はこの作者は、「曠野」の主人公のように弱くなかったところが良かったと思いました。（感想例2）

第三は、作者に肯定的で、作者の気持に共感でき、深い理解を示しているものである。

○　蜻蛉日記を読んで、強く心うたれたところを特にあげれば、やはり父の旅立ちである。父が遠い国に赴任していくことになり、母のいない作者にとっては、いっそう心細く感じられる。

夫の兼家に対しても、「人の心はそれに従ふべきかは」「人の心もいと頼もしげには見えずなむありける」と夫の愛情に不安を感じる作者を見ると、その当時の女性の不安定な生活と、作者のただもう心細くやりきれない気持ちがよくわかるような気がする。倫寧も任地に赴くにあたって、娘を京に残していくことを案じ、「ほろほろとうち泣きて」旅立っていく父親と、それを見送る娘の様子を思いうかべると、私もたまらなく悲しい気持ちにそそられた。一夫多妻制の当時においては、多くの女性が体験した宿命であったとはいえ、現在の私たちの生活と比較すると、あまりにもみじめに思えてくる。作者の純粋な心にほんとうに心うたれたと同時に、もし私があの時代に生きていたらどうだっただろう。毎日泣いていたかもしれない。いやもし私だったら、子どもをつれて逃げ出したかもしれない。しかし全体を読んでみると、作者の強情なところも少しあると思うが、女であるのだからむりもないと思う。いずれにしても作者が悲しみにたえながらも強く生きぬいた人生には、ほんとうに心うたれた。（感想例3）

○　まずこの本を読んで感じたことは、藤原道綱の母の愛情深いまごころがよくわかる。作者は、兼家の正妻ではないのに、夫の浮気によって、たちきれない男女の愛情の苦しみをたくみにこの日記に記してある。美貌の持ち主であったと聞いているが、最後までひとりの夫と子を守り続けた純情一すじの女であったと思う。

作者の兼家に対する一つ一つの行為が、いとも冷たい態度のように思えるが、兼家を愛していたからこその行為ではなかろうか。気が人一倍強い女の人であるから、心では思っていても態度であらわすことが出来ない人だと思う。

夫兼家が町の小路の女の人の所へ行き、暁方門をたたく。作者は不愉快で戸を開けさせない行為について、私が思うには、現代の私達から考えてみると、当然それであたりまえだと思う。でもあのころの女の人の行為にしてみれば、少しひどいというか、もしあのことで二人の仲がこわれたら、損をするのは女の方である。その点がかわいそうになってくる。心から愛している人が他の女の所へ通っているなんて、たまらない気持ちだろう。だけど兼家には時姫という正妻がいる。その人のことは何とも書いてないけれど、その人から見ても、作者は、作者が町の小路の女に対する

ものと同じものではなかろうか。

作者は女としてすばらしい人だと思う。兼家一すじに心をよせ最初から最後まで苦しむけれど、作者にとってそれがしあわせであったように思える。私はこの時代の女の人の気持も現代の女の人の気持も変らないと思う。しかし一夫多妻のこの時代にもし私が生きていたら、もし作者と同じ立場に立ったなら、作者以上に冷たい行為をしていると思う。兼家は作者がこんなにまで思っているのに、何故浮気をするのだろうか。兼家も作者を思っているように思えるのに。男心はまったくわからない。この時代の男の人はわがままに思う。

最後に、この時代の女性に生まれなくて良かったなあと思った。

（感想例4）

第四が、作者の生き方に心から共鳴し、賛美しているものである。

○　（前略）私が彼女に一番心ひかれたのは、日本古代の三美人の一人と言われた彼女が、苦しみながらも兼家を愛し続けたいちずな心と、彼女が自分の苦しみを単なる不幸な女性のぐち話だけに終らせないで、その苦しみを後世に残すすぐれた文学作品として書き残したところに彼女のすばらしさがあると思う。

私達はとかく自分が不幸だと思ったらその不幸に甘えてしまって何も見えなくなってしまうが、彼女は自分の不幸を大きな目でみつめ苦しみながらも生きぬいたすばらしい女性のひとりだと思った。

普通科乙でも、西洋紙$\frac{1}{4}$に自由な感想を求めた。甲以上にさまざまな反応を示している。

まず、蜻蛉日記の学習を、おもしろかった。有意義であるとするものがあった。

○　今までほんの少ししか古典にふれたことがないので、大きなことはいえないが、とにかくそのなかで最もおもしろかった。私は〝徒然草〟が好きだが、それとはまた別のおもしろさがあるのだ。いつの世でも、つらく苦しい目にあうのは女の人だった。歴史を顧みてつくづく感じる。平安時代に生まれた女の人も同じことだ。道綱母は、それに憤りを覚え、反撥を強く感じているのだけれどもどうしようもない。彼女にはどうすることもできず、他の女の人と同様、じっと耐えてゆかねばならなかった。せめてもと彼女が兼家に対してつらく当たる、その心がいじらしく思えてならない。

彼女の愛は夫との不和による苦悩、あきらめから子の道綱に注がれてゆく。こんなことは今でもよくあることだと思うが、彼女の愛は盲目的だ。道綱の元服のところで読んだだけでも、〝いとあはれにうれしきここちす〟と、うれしくてたまらない様子が目に浮かぶ。道綱だけが生きがいだ。―そういう感じである。

蜻蛉日記では、妻として、母としての女の苦しみ・悲しみ・喜びが私達の胸にひしひしと伝わってきて、私達を深く考えさせてくれる。私は楽しく読むことができ、古典への理解を少しばかり深めることができたと思うし、又、同時に、現在の自分や自分のまわりを見つめ直すよい機会であった。

（感想例6・女）

鋭い読みとりができ、女性の悲しい業を見出しているものもある。

○　悲しい女の性だ。特に自尊心の強かった作者には、やりきれない毎日であったろう。

そもそもこの日記が生じる原因というものは道綱母と兼家との

女へのひいては当時の因習に対する考え方の相違である。兼家もあまり責められないと思うのは、当時において、兼家のような考え方が当り前で、むしろ道綱母が余りにも進歩的で、又多少の傲慢さをもっていたからである。

しかし、女というものは悲しいもので、いくら裏切られて憎く思おうとも、奥底にある理屈では割り切れない愛情は、どうしようもなく表われるものだ。私が特にそれを感じたのは、道綱の元服の段で、行列に加わっている兼家を見て深い愛情を禁じ得ない場面である。

それにつけても、当時の人々が、現代を見たり、谷崎の「痴人の愛」などを読んだら、いかに思うであろうか。（感想例7・女）

道綱母の愛に疑惑的で、批判的なものもあった。

○　女性特有の性質をもっているにすぎない女性、しかし彼女の愛がはたして純粋なものかどうか疑わしい。なぜなら、あれほど思いこがれる兼家に対して、自分はこれだけ愛しているのに、どうして愛してくれないのかと思って、自分の愛に対する兼家の代償をもとめていることである。

たしかに、生活力のないその当時の女性にとって、自分をやしなってくれる男はだいじであっただろう。しかし、そのすてられては困るという一心が根底に流れているような愛情は純粋なものでないと思う。最後まで自分が特権階級の人間であることをすてようともせず、自分は他人と違うんだというぬぼれがあったのではないかと思える。（感想例8・男）

道綱母の生き方に、愛に生きる女性の美しさを見出しているものもある。

○　私は、堀辰雄の「かげろふの日記」を何度も読んだ。最初読んだ時は、じれったいと感じ、以後回を重ねていくうちに、あわれや女のひたむきさを感じた。

道綱の母ばかりでなく、この時代に生きた女性みんなに対して私は複雑な気持ちである。男だけが頼りで、ただ男の来るのを待つばかり、音信といえば、歌を書いた文だけで、まったくあわれとしか言いようのない生活である。しかし、その反面、愛に生きる女性の姿は美しい。どのようにつらいときでも、また悲しい時でも、耐え忍んでいるのも男に対する愛があるからである。その両極端な面を見て、私はこの時代の女性、道綱母が幸福だったか不幸だったかは言えない。そういうことがこの時代の女の姿だったのだから……。

道綱の母には意地の悪いところがある。しかし、それは女の男に対する甘えではなかろうか。女は男に何度も何度もそっけなくしているが、必ず後悔に似た気持ちを後で抱いている。最後にはまるで味もそっけもないようなのに、また作者のふしぎな感情がこみあげてくる。男と女の話などに終りはなく、離れてもまた結びつくものだと思う。

道綱の母の愛に生きる姿は美しいと思うが、愛につかれた女の執念というものも、私は感ぜずにはいられない。（感想例9・女）

道綱の母のあり方をりっぱだと肯定する女生徒も多かった。

○　当時の世の中は〝一夫多妻〟で女性にとっては、とんだ迷惑である。道綱の母も例にもれず、兼家という人がいた。ここでは、兼家が夕方近く「どうしても行かなければならないことがある」と言って出ていったのをつけさせて、「町の小路にとまった」と

いうことを聞いて兼家を入れさせなかった。この点で彼女を見直した。普通の女性だったらおこってはいるものの男性が訪れると自分をいつわって男性を入れると思う。現代ならともかく、当時は大変なことだと思われる。こういうところが道綱の母はよい。

兼家も随分勝手な男でもう少し思いやりがあってもよい。でもやはり道綱の母も女である。当時の女性としては仕方のないことであろう。とにかく私は現代に生きていることに喜びを感じる。女性は地位向上を目ざして戦うべきだと思う。（感想例10・女）

○　男生徒には、道綱母に同情できないと批判的な意見が多かった。この日記を読んで、読者は非常に作者道綱の母に同情を感ぜずにはいられないだろう。　が、なぜこのような愛に作者が苦悩しなければならなかったのか。結局、作者のあまりに強い気性がそうさせたのである。他人をうけ入れないで、夫の愛をひとりじめにしようとした心……しかし、現代と違って、昔は一夫多妻、男尊女卑の世である。しょせんかなわないことなのに、頑強に夫の愛をひとりじめしようとする。そうすればするほど、そんな妻にいや気がさして、通わなくなってくる。要するにいたちごっこである。晩年には作者もあきらめたようであるが、もう少しこんな自分に気づいていたら、こうも悩まないですんだはずである。夫を責める前に自分の夫に対するいたらなさを責めるべきであった。それも美人であるが故にできない話か。それにしてもなんとぜいたくな悩みであることか。この頃の人は生きることせいいっぱいなのに。こういう理由により、作者には同情できなかった。

（感想例11・男）

男子にも、批判を忘れないが同情的なものもあった。

○　人間赤裸々な心、僕としては、ただ美しいだけの物よりうなずける。作者は普通の人とは多少しっと深いと思われるけれども、それはまたそれでうなずける。

しかし、男性の気持ちのわかる女性とは言いがたいようである。

（感想例12・男）

蜻蛉日記の学習はおもしろ味がない。つまらない、閉口させられたとする男生徒もかなりいた。

○　この文章を読んで平安時代の女性の気質というものが良くわかった。しかし、問題はこの人はその当時の上層階級の人であり、何不自由なく夫との愛情の世界のみを考えていることである。そこには生活への執着というものが見られない。ただ女のしっとの念をまざまざと見せつけているに過ぎないとも思える。

これを読んでいる限り、この女に不満を覚える。先日「曠野」を読んでもらったけれどもその主人公に比べると比べようがなく同じ女の生き方でこうも違うものかと驚くばかりである。同じ愛情にしてもスケールが小さすぎる。世俗的で清らかさがない。

この日記は作者が相当年をくってから書かれたからかもしれないが、自分ばかり肯定して、自分の非を認めようとせず、一人よがりのところがあり、いじわるめいた感じもする。

女流日記文学の先駆者だそうだけれども、土佐などのさっぱりした面や、良い意味でのおもしろみがない。とにかく僕は蜻蛉日記には全く閉口させられた。

○　こういう文はぼくにはおもしろくない。あきてきてつまらなかった。おもしろくなかった。

ぼくは躍動的に進展していく文を非常に好む。これはぼくには

作者が非常にあわれに思われた。どんな時どんな時代でも自分で苦局を切り開いて行こうとすれば、良い面も出てくると思われる。

先生はこの時代　女性はだれかにたよらなければ生きていけぬと言われた。しかし、ぼく個人の考えとしては今日からとうてい想像されえない。

つまらぬお話にでしかぼくにはすぎない。つまらぬお話だ。素直な気持。

（感想例14・男）

まとめ―結果と反省―

1　「曠野」への興味・関心度は高く、おもしろいとする生徒が大半である。平安時代の女性の生き方を考えさせるのに役立つだけでなく、古典への関心を高める好個の教材であると言えよう。

	甲	乙（男・女）
㋐大変おもしろい	20	3（0・2）
㋑おもしろい	22	31（14・17）
㋒普通（まあまあ）	2	8（3・5）
㋓おもしろくない	1	7（2・7）
㋔その他	0	3（3・0）

○　原文今昔物語を読みたい（男）

○　古典の文学には現代の世の中にないきれいで純粋な愛の素材をもっていると思いました。（男）

○　とても興味深い作品だと思う。古典の作品は敬遠していたのだが、こういう作品なら読みたいと思う。（乙・女）

2　「かげろふの日記」への甲の生徒の興味度は、「曠野」に比べるとかなりに下まわっている。

興味度

㋐大変おもしろかった	㋑おもしろかった	㋒普通（まあまあ）	㋓おもしろくなかった	無記入
4	15	23	3	2

A　おもしろかった理由

㋐　真実さへの共鳴

作者の本当の気持が書いてあったので　2

自分をありのままに書いているので話に自然と入っていかれる

㋑　作者への興味

兼家に対する作者の心情　3

道綱母の気持がいや味たっぷりと兼家に対して出されているので

平安時代の女性のイメージとちがって現代女性に似た女性なので

㋒　女性の生き方への関心

当時の女性の生き方に興味があったので　2

当時の一夫多妻制に対して女性がどのような気持でどのような生活を送ってきたか　2

男がだんだんと女から離れていくのを女性はそれに対して
どんな態度をとるか

㋓ 時代への理解
この時代の風習においての人間関係
そのころの生活様式がわかった

㋔ その他
はじめはよくわからなかったがだんだんよくわかるようになった　2
一回読んだだけではわからないけど、二回三回とわかったので

B　あまりおもしろくなかった理由

㋐ 作者の生き方への批判
この女性の生き方がすきでなかった　あまりにも自分のことしか考えていない
「曠野」の女性とは反対に自分勝手なことばかりしているから

㋑ 作者の性格・心情への批判・反撥
女性がいじをはったところ　2
読んでいくにつれて女性の弱い面といやな面とが出てきたこと　作者の気持が正直に書いてあるので同じ女性としてなんとなくみにくい面を知らされたようで、いやな気がした　女の人の感情をあまり好まないので、読んでいて頭にくることが多かった
「曠野」の女性とは反対であるので、女らしさがない
変化にとぼしく、主人公の心が酷い

兼家のことを言うのに、くどすぎる

㋒ 作者の心情・行為への疑問
はっきりと作者の心が理解できず、わからないところがあった
現代では考えられないことなので実感として親しめなかった
この内容が日記なので、書いた人の心しかわからないので

㋓ 作品としての理解しにくさ
「曠野」に対して読みにくかった
長すぎる

㋔ その他
あまり興味をひくようなところがない
心を強くひかれるところが少なかった
「曠野」がおもしろく、こちらに興味がわかなかった
かわいそうであった
理由の記入のないもの　7

3　「かげろふの日記」の理解度も十分でない。道綱母と兼家の人間像のはあくについては、特にそう言える。

理解度

㋐よくわかった ㋑だいたいわかった	41　2
㋒わからなかった 無記入	2　1

A　わかった点　　無記入　11

㋐　作者の心情・態度
女性がいじをはった点　2　女性が男性に冷たくした点
作者が兼家に対してすなおになれない気持
夫への嫉妬心
作者が口で反抗的な態度をとっているが、心の底には兼家への深い思いがあること
道綱母は兼家の気持がわかっていない
夫を理解しようとつとめるところ
夫が自分のもとへもどってこないため、こどもへの愛と期待が求められている
作者が父を慕う気持ち　2

㋑　作者の性格
道綱の母は利己主義的な面がある　2　自分勝手だ
（例えば他の女性の不幸を喜ぶ）

㋒　兼家の心情・行為
兼家は道綱の母の気持ちがわかっていない
兼家が最後に道綱母の前でとりみだしたときの気持
兼家の男性としての気のよさ

㋓　父の気持
娘を思う父の気持　道綱母の父が別れていく時の気持

㋔　道綱の立場
道綱が父と母の間にあって苦しんだこと　3　道綱のつらい立場
当時の女性の生活と生き方
平安時代の女性の生き方　11　一人の男性を頼って生きる女性の姿　6
当時の女性の不安定な生活　2　この時代の夫婦の間2
昔の風俗・習慣　3　当時の女性の地位の低さ
（男性が女性のところへ通っていく）

㋕　その他
女性の心理状態
夫婦愛　女の嫉妬は男の人をわるい方へと向けていく

B　わからなかった点　無記入13

㋐　作者の心情・行為
この女性の感情の動き　7　道綱母の気持ち　4
道綱母が兼家にとった態度　3
なぜもっと素直にならないのか　長い間なぜすねるような態度をとったか　どうしてやさしくしてあげないのか
なぜ強情をはったのか
納得のいく話しあいができなかったのか　どうして兼家をさけたか　寺にこもったりして兼家になぜ会って話そうとしなかったのか　2
なぜ道綱母は自分の気持ちを夫にはっきり示さないのか
なぜ心に思っていることと行動とを反対にしたのか
どうして兼家がくるとあんなにつんつんしているくせに、自分のところへこないと淋しがるのか
一夫多妻の社会ということを知らなかったのか
子どものために生きようとしてかえって子どもを苦しめて

いるような点
最後の「いつか私の番になっていた」というところ　3

㋑ 兼家の気持・行動
兼家の道綱母への気持　3　最後にそばにあったものをなげ散らかした気持ち　道綱母の気持ちがわからなかったのか　作者から冷たくされても通ってくる気持ち
他の女性のところへ通っているくせに平気な顔をしてやってくる

㋒ 当時の制度・風俗・習慣
昔のならわしとは言え男の人が他に妻をもつこと
物忌みが多い　2　身分の低い男性も幾人もの妻をもっていたのだろうか

㋓ その他
作者にどのような魅力があったのか
道綱の母親に対する心の動き　6

4　「かげろふの日記」の読後感では、感想例1のような、作者の性格や生き方への反撥・批判が多かったが、原文を学習した後は、感想例3・4・5・6・9・10のように、同情的・共感的なものが多くなった。そして〝私は「曠野」より、この方が読みがいがあった〟（甲・女）という感想もあらわれている。原文をじっくりと読み味あわせる必要を感じさせる。
　因みに、「かげろふの日記」読後の、道綱母の生き方・人間像は次のようにとらえられている。

道綱母の生き方―兼家への行為をどう思うか―

無記入　5
答にならないもの　3
（単に生きかただけをのべたもの）

A　否定的な感想
① 利己的な生き方がいやだ。
② 自己の強情さをもっとおさえるべきだ、あまりにも強情だ。4
③ 兼家という人をわかろうとしたことがなかったと思う。
④ あまりかたくなになりすぎているので少し反感をもつ。
⑤ 兼家が手紙を書いたりしてよこしているのに、道綱母は答えようとはしない。この母はこの時代にふさわしくない。
⑥ すきなくせに兼家から離れて、来たらつめたくするというしぐさは少しいけないと思う。
⑦ あまり賛成できない。

B　批判的な感想
① 自分の心にもっと素直になったらよいと思う。　4　言いたいことを素直に言えばよいと思う。　2　少しひねくれている、もっと素直に自分の気持をあらわしたらよかったと思う。
② 兼家がすきなら、こんな冷たい態度をとらずに見守ってあげたらよいと思う。
　少し冷たい人だと思う。少し冷淡な態度である。
③ 兼家の行動を非難する前に自己の気持から考えたらと思う。
④ 最初少しだけならすねることもよいがいきすぎだと思う。
⑤ 男の人を本当に愛しているのなら、男の人のうらの心をついて

もっと思いやりをもって接すべきだ。
⑥ 当時としては、主人公の行為はわがままであったのではなかろうか。
⑦ 当時の女の人としては強かったのではないかと思う。
⑧ 当時は一夫多妻の世の中であるので、もっと自分に対して素直になるべきだと思う。
⑨ 女が男に対してつめたくした行為はわかるが当時は一夫多妻の世の中だったので、そこをもう少し理解すればよい。
⑩ 他の女性のところに通っていくのに嫉妬するのはわかるが、行為が大胆すぎる。
⑪ あまりそのような行為はすべきではない。この時代の女性はみんなこんな生き方をしていたのだし、なぜ信じようとしなかったのか。

C 同情的な感想
① いじらしいと思う。
② 自分の気持を素直にあらわせないかわいそうな人だと思う。わかるような気もする。
③ 反撥心もあり、しんがあるが、繊細なところもある。
④ この時代として男に頼るのはしかたがないと思う。
⑤ 作者はこの当時の人としては異質的な存在で、現代に生きた方がよかった。

D 肯定的な感想
① 遠ざかったり近よったりする兼家の気持はわかるが、わたしが道綱の母だったら、兼家を許すことはできない。 4
② 当然とるべき行為だと思う。 2
③ 素直だからこのような態度をとったのかもしれない。
④ 兼家より上手でえらかったと思う。
⑤ 自分の意志を貫き通したことはりっぱだと思う。
⑥ 一回目に読んだときは、わがまま勝手な行為だと思ったが、よく読んでみると、その当時、一夫多妻制は当然であったけれども作者は純粋な心であっただけに、それが許せなかったのだと思う。だから作者の行為はりっぱなことであると思う。

E その他
① 平安時代の一夫多妻制にマッチしていない。現代女性の感じをもっている。
② 理性的・個性的でもし現代に生きるとしたら作家になっていると思う。

道綱母の人間像　三つあげ、そのような人がらをどう思うか記せ

A 批判的な理解
① 強情な人、頑固 8　いじっぱり、かたいじ 3
　→もう少し素直にしたらよい。
② 気が強い 5　感情が烈しい 2　まけずぎらい・執拗
③ やさしさが欠けている 2　女らしいかよわさがない。
④ 素直さが欠けている・自分の心が素直に言えない人。思ったことがはっきり言えないでいつも心の中だけで考えている。
　→自分で自分をみじめにしているようなものだ。
⑤ すぐひがむくせがある。兼家に対して自分の気持に正直になれない。

⑥ 独占欲が強い。
⑦ しっと深い・女性にはだれにもしっと心があるが特に強い。
→女の特質があらわれている。
⑧ 利己主義
→いつもじめじめしていてすきでない。
⑨ 冷たい。
⑩ 人を信じることができない・たえず心にくろい陰を残している人。
→いつもじめじめしていてすきでない。
⑪ 少しわがまま。
⑫ 思った人に頼らないで父に頼りすぎている。
→あまりよいとは思えない。
⑬ 道綱の心理（子ども心）をわかっていない人。
道綱を自分の気持次第で使っている。
→妻として母として失格。　もっと道綱がしあわせになれるよう努力すべきではなかったか。
⑭ この時代の女性の全部が弱くてやさしくて思いやりのある女性だとばかり思っていた。しかしそれは反対で現代よりももっと心のきたない女性がいたと思った。

B 好意的な理解
① 道綱をたいへんかわいがる　2　母性愛の強い人。
② 涙ぐましさ　5　気が強くみえるが本当はそうではない。女としての弱さ　2。
③ 根気強さ　5　意志が強い。
→この時代において自分の意志を貫いたことはりっぱ。
④ 貴族一般の女性よりも教養がある　2
⑤ かしこい　2。
→りっぱな人・見ならいたい。
⑥ 行動力がある。
→うらやましい。
⑦ 何ごとも中途半端ではすまされない人。
りっぱなことであると思う。
⑧ 温厚な女性であり、最後まで一人の夫と子を守る純情一すじの人。
⑨ わるく言うと意地っぱり、よく言うと自分の意見をもつ強い人。

5 「蜻蛉日記」の学習について、男生徒は作者に批判的（感想例8・11・13）で、女生徒は同情的共感的（感想例2―4）であった。女生徒は感想例6のように、かなりの関心を示したが、男生徒は感想例13・14のように十分な関心・理解を示していない。

以上のことから、一つの作品の読解鑑賞指導のための留意点をまとめれば、次のようになろう。

(一) 作品への関心を高める。蜻蛉日記の指導の場合、さらに平安朝女流日記の指導では、男生徒にどう対処するかが問題となる。女生徒は、同性としてかなりの関心を示しうるが、男生徒の学習意欲は低い。これは古文学習、ひいては国語学習でも言えることである。蜻蛉日記の場合では、愛の問題を中心にすえ、男対女、女心とか女人像に焦点をあつて、男生徒も興味をもちうるよう、つっこみを

深める必要があった。総じて、生徒の実態に則して、作品の本質をえぐりながら生徒の関心を正しく伸ばしうる指導の観点（立場）・目標を明確にすること、作品のさわりとなる部分を紹介したり、蜻蛉日記であれば、堀辰雄の〝七つの手紙〟や、室生犀星の〝かげろふ日記遺文〟をとりあげて、文学者の独自な作品解釈を紹介するなど補助教材を積極的に利用することなど、配慮すべきであろう。

(二) 作品全体での位置づけをたしかにする。蜻蛉日記のような自叙伝的作品であれば特に、採録部分を作品全体の流れの中で理解させることもたいせつである。現代語訳を読むよう指導するとか、年譜の作成利用によって、位置づけを明確にするとかが必要であろう。作品の本質的な部分が採録されていない場合は教材を補うなどして、作品の本質とのかかわりを明らかにする必要があろう。

(三) 分析の角度を明確にする。単なる口語訳・通釈だけではだめである。表現にそって、どういう角度から内容を分析するかのくふうが必要である。生徒の作品分析の技能を高めるためにも、作品分析したものをどのように板書化するか、それを生徒のノート法にどう反映させてどのように独自なノートを作らせるかの配慮も必要となる。そうすることによって、原文学習の意味も深められるのである。

(四) 時代背景を理解させる。生徒の時代への関心は強い。(1)父との別れで行なったように、同時代の他の作品を援用して、時代的な風潮、ものの考え方感じ方や風俗・習慣を明らかにする必要があろう。平安時代では、源氏物語や枕草子などがそうした時代理解に役立つ。生徒は、古文学習によって、時代の生きた知識を身につけるのである。「物忌み」「うつろひたる菊の花」といったものについても語釈だけでなく、時代的な分析検討が当然必要となってくる。

(五) 感想文の作成を重視する。たくさん書かせなくてもよい。まず自分自身で考えたり・感じたりしたこと、主体的な感想・疑問・思いつきなどをこまめにメモする習慣を身につけさせたい。作品鑑賞はそこから出発させたい。次に自己のメモにもとづいてグループで話しあう鑑賞指導を強化したい。そこで、自己の考えを客観化し深化させて、感想文にもっていく方法を充実させたい。

(六) ことばへの感動を深める。原文のことばに共鳴できるよう、ことば・文章への感覚を鋭くしたい。生徒の感想文には、原文を引用して自己の感想を述べているものが意外と少ない。原文のことばを見つめとらえて、共鳴し共感し、感動を深めない限り、作品から離れた空疎な感想におわってしまう。そのためにも、音読を重視し、原文を深く味あわせる配慮がやはり古文学習指導の第一歩となろう。

注一、堀多恵子編〝妻への手紙〟（新潮文庫）

注二、〝曠野〟アンケートの結果については紙面の都合で割愛する。

注三、藤原与一先生の読解の三段階法については次の著書がある。

〝毎日の国語教育〟（昭30・4福村書店）

〝国語教育の技術と精神〟（昭40・7新光閣書店）

〝ことばの生活のために〟（昭42・1講談社現代新書）

〝理の国語教育と情の国語教育（昭45・11新光閣書店）

注四、作品分析については、かなりの誤謬や独断など未熟な点があるが、今後修正していきたい。

注五、各時間の学習の記録を出席順に一名ずつ書かせている。内容は、板書、学習過程、授業についての印象、印象点や考えさせられたこと、わからなかったこと、聞きたいこと、問題に思ったこと、授業態度とその反省、授業についての助言、注文などである。

注六、蜻蛉日記序については難解でさまざまな解釈がなされているが、内容に重点をおいて、諸説にはふれなかった。

注七　本稿は、43年度広島県教育課程研究会国語部会（43・8・12～13於広島皆実高校）、及び第16回広島県国語教育研究大会高校部会（43・11・14於大下学園祇園高校）で、報告提案したものである。

48・2・20稿

（広島県立広島皆実高校教諭）